

## 128. 高齢者における身体機能と日常生活の自立度との関連性

○重松 良祐<sup>1</sup>, 金 憲経<sup>2\*</sup>, 西嶋 尚彦<sup>2\*</sup>, 田中 喜代次<sup>2\*</sup><sup>1</sup>筑波大学大学院, <sup>2</sup>筑波大学体育科学系

\*TARA 人間生態システム研究アスペクト

【目的】日常生活における健康づくり推進を目的とした、高齢者の体力測定や運動指導が数多く行なわれるようになってきた。ここでは高齢期における身体機能水準の保持が日常生活における自立した身体活動の維持につながるという仮定に基づいているものの、身体機能と日常生活の自立度との関連性は実証されていない。そこで本研究では、高齢者の身体機能と日常生活における自立度との因果関係を検討することを目的とした。

【方法】対象者はI県に在住し、地区単位のシルバークラブもしくは任意の活動団体（クローケー、カラオケなど）に所属している60歳以上の在宅女性219名（72.9±7.0歳）で、老人福祉センターの登録名簿から二段無作為抽出した者であった。身体機能の測定項目は重松ら（1998）に準拠し、連続上腕屈伸、8の字歩行、豆運び、ファンクショナルリーチの4項目であった。日常生活の自立度の測定項目は金ら（1994）の質問紙に準拠し、全身の移動、上肢の操作、手指の操作、起立・姿勢変換の4因子を測定する16項目であった。身体機能と自立度との間の因果関係は、多重指標モデルによる共分散構造分析を用いて分析した。先行研究に基づき、4つの検証仮説から構成される因果構造モデルを構築した。（1）連続上腕屈伸、豆運び、8の字歩行、ファンクショナルリーチの4項目のテスト成績は身体機能からの影響を受ける。（2）日常生活における自立度の4因子（全身の移動、上肢の操作、手指の操作、起立・姿勢変換）は対応する質問項目に影響する。（3）全身の移動、上肢の操作、手指の操作、起立・姿勢変換の4つの因子は自立度からの影響を受ける。（4）自立度は身体機能からの影響を受ける。

【結果】（1）4テスト項目に対する身体機能の因果係数は0.21~0.80（0.55±0.25）、（2）16問の日常生活における動作項目に対する4因子の因果係数は0.10~0.91（0.72±0.21）、（3）4因子に対する日常生活の自立度の因果係数は0.77~0.95（0.87±0.08）、（4）日常生活の自立度に対する身体機能の因果係数は0.54、であった。因果係数はすべて有意であり、標本分散に対するモデルの適合度は、GFIが0.81、AGFIが0.76と比較的高い値を示した。

【まとめ】在宅高齢女性を対象として、パフォーマンステストで測定される身体機能と質問紙で測定される日常生活の自立度との間の因果構造を推定することができた。この結果は、高齢者における日常生活の自立度が身体機能水準の影響を受けていることを示すものと推察された。

高齢者      身体機能      自立度